

「イア活動がそれである。その顛末については、『トイレのお仕事』（集英社新書）を読んで頂きたい。

さて、ニューヨーク水族館に壁画トイレが完成すると次に私はニューヨーク市公園課からの依頼を受けて、マンハッタン北部のいわゆるハーレム地区のリクレーションセンターのトイレに壁画を描くことになった。おかげで、アメリカの役所との付き合いが増えた。「もし、私が作品ファイルを手にいきなりリクレーションセンターなどに売り込みをしたらどうかしら。それでも私にチャンスはあったかしら」

市公園課担当の女性がトイレ調査のため車で案内してくれたとき私は思い切ってそんな質問をしたみた。

「もちろん！ 私たちニューヨーク市の職員は、市民の様々なアイデアだけでなく、苦情でも文句でも何でも聞くわ。市民の声をいろいろと聞いてそれぞれに応じて行く、そういう器量や素質があるか

らこそ私たちスタッフはこの職場にいられるの」

市公園課の緑色の車だけが通行できる、セントラルパークの専用ルートを走らせながら、彼女は誇らしげにそう言った。春の訪れとともに一斉に咲き乱れるピンクの木蓮、黄色のレンギョウ、桜を思わせる白い花、黄緑色の鮮やかな花などに目を奪われながら、私はアメリカの役所は随分と違うなあ、プロ意識十分だなあと感心したものだ。

さらに日本の役所と違うところは、自分たちの仕事が新聞やテレビなどのマスコミに派手に報道されてこそ意義深いという認識、つまり市民に喜ばれて初めて自分の仕事は評価される、という姿勢だ。だから、マツナガの仕事に關しては任せてくれ、新聞・テレビを徹底的に呼んで話題にするからと言うのだ。

制作資金については、市の予算から引き出すのが厄介で苦勞するのは何処も同じだ。しかしニュー

ヨーク市公園課では、今回は個人投資家や地元の経済団体に呼び掛けて資金を集め、私の会社の口座に入れてくれるのだという。資金集めの選択肢も一つではないのだ。

アメリカの役所は現実的で分かりやすくいいなあ、二十年以上も日本の役所に泣かされてきた私は、また感心するのである。

## 「アジア・オープン・フォーラム」の十二年

中嶋嶺雄

（東京外国語大学）

日本と台湾の知的交流の場として十二年間続いていた「アジア・オープン・フォーラム」は、この十月末の第十二回松本会議で、一応の幕を下ろすことになった。李登輝・前台湾総統は、このフォーラムに直接かわられたパートナーである。すでに副総統時代から親しくさせていただいたいた私にたいし、李登輝氏は、総統就任間

もない一九八八年七月、こう要請された。「これからは米台関係とともに、日台関係がとて重要です。それなのに、従来の日華関係のパイプは硬直していて、日台関係やアジア太平洋地域の問題を広く、つっこんで議論する場になっていない。新しい交流の場を是非つくってほしい」と。

私自身もまったく同感だったので、翌日夜に会食にお招きいただいた席で、要請にお応えしたい旨をお話し、テーブルを囲んでいた方々から賛同の拍手を得たのであった。

こうして私は重い任務を負ったのであったが、それが「アジア・オープン・フォーラム」として結実するまでには、多くの関門があった。まさに広い知的交流を目指すものである以上、日台双方のメンバーは、高いレベルの知識人や財界人であるべきで、党利党略や利権がらみでかわりがちな政治家は排すべきであろう。また、あくまでも民間のチャンネルであ

り、財政的にも日台双方が相互主義の原則を貫くべきであるので、どのようにメンバーを募り、資金を調達すべきか、等々の問題を解決しなければならなかった。

私はまず亡き高坂正堯氏や山崎正和氏、飯田経夫氏らの畏友と相談し、故・稲葉秀三氏や故・井深大氏のご意見も頂戴した。財界側からは亀井正夫氏、堤清二氏らの賛同とバックアップを得るなどして、徐々に形が出来上がっていった。当フォーラムは、まさに開かれた知的交流の場として、討論内容も予算や経理もすべてオープンになっているけれど、「アジア・オープン・フォーラム」という名称は、高坂さんの提案であった。こうして「アジア・オープン・フォーラム」は出発したのだが、そこになお困難がなかったわけでは決してない。まず、このフォーラムが台湾を対象としており、当時台湾はマスメディアにおいてもタブーであっただけに、一部の方々、そしてかなりの方面から白

眼視された。それまで親しかった友人でも参加を得られない場合があったり、当初はメンバーに予定していた学者に中国側から声がかかると、急に参加を断わってきたり、といったこともあった。しかし、約一年近い準備ののち、北京で六・四天安門事件が起こった直後の八九年六月に、第一回会議が李登輝総統も出席して台北で開かれた。

以後、日本と台湾で毎年交互にフォーラムを開催し、米国、フランス、中国、香港、韓国、ロシア（ソ連）などからのゲストもしばしば加わってきた。この間、九〇年の第二回東京会議の貴賓・郭婉容女士は、日台断交後最初に来日した台湾の現職閣僚（行政院財政部長）であった。九二年の第四回京都会議に際しては、現職内閣官房長官の加藤紘一氏が会議後に東京で台湾側代表団の主要メンバーを招宴されたが、それも日台断交後初めてのことであった。私たちは当フォーラムへの李登

輝総統の出席を実現すべく政府首脳と交渉し、実際、第四回会議を京都で開催することにしたのは、当時はまだ今日ほど大きな外交問題になっていなかった李登輝総統の来日を考慮して、外務省のトップとも打ち合わせたうえのことであった。ホテルのスイート・ルームなども事前にチェックしたり、様々な手配もしていたのに、実現しなかったのは残念である。一年近く前から開催日と会場を決めねばならない当フォーラムの会期が、その後の日本外交によって決まった天皇・皇后両陛下のご訪中直後であったためということもあったが、結局は李登輝氏ご本人が内外の諸般の状況から訪日を断断されなかったのである。「中嶋先生にここまでやっていただいたのに、すまないけれど……」と言われたときの同氏の表情が忘れられない。

九四年の第六回横浜会議の折には、森喜朗・自由民主党幹事長による朝食会が催され、同幹事長は

九八年の第十回松江会議の後にも東京で台湾側主要メンバーを招宴されたが、この頃になると日台関係が緊密化した反面、中国側を刺激しないための配慮がことさらに必要になってきていた。「アジア・オープン・フォーラム」は台湾財界のリーダーで中台関係の責任者、辜振甫・海峡交流基金会董事長が台湾側団長を務めていたこともあって、いわば民衆外交の役割も担っていたといえよう。

しかし、にもかかわらず今回の松本会議をもって一応の締め括りにしたいと決めたのは、やはり物事には「始めがあれば終りがある」（有始有終）からであり、盛んなときに閉じたいという美学からである、とでもいえようか。李登輝時代の終焉を迎えて、李登輝氏と私たちとの出会いを大切にしておきたい心情からでもあ

る。いずれにせよ、民主化とアイデンティティーの深まりによって、この十二年間に台湾は大きく変わ

り、強く発展した。国際社会から公的には締め出され、中国からは執拗な圧力を受けながら、それに堂々と耐えてきた台湾の現存は、その多くが開発独裁体制をとっているアジアを変え、やがて中国大陸を変えていくであろう。同時に日本国民のあいだに芽生えた新生台湾へのシンパシーは、昨秋の台湾大地震への広範な支援となり、現在では李登輝氏来日を支持する強い国民世論となつて広がっている。

このような台湾認識の深化に「アジア・オーブン・フォーラム」がいささかでも貢献できたと思えば、当フォーラムの使命もここに完結したといえよう。

## 大宅壮一氏の魅力

植田康夫

(上智大学教授)

一九〇〇年九月十三日生まれ、一九七〇年十一月二十二日に

死去。そのため、今年が生誕百年、没後三十年に当るのは、評論家の大宅壮一氏である。生前の大宅氏についてはかつて社会党委員長だった浅沼稻次郎氏が「カラスの啼かない日はあつても、大宅氏の声がラジオやテレビから聞こえない日はない」と評したほど、放送、活字両媒体にわたつて活躍し、人気のある評論家であつた。

とにかく、何か事件があれば、人々は「大宅氏がどのように批評するかを期待した。そして大宅氏が社会の様々な現象に対して見立を行い、その現象についてズバリ診断を下した言葉は、流行語となつて、人口に膾炙した。それらの言葉の幾つかは、「駅弁大学」「恐妻」「一億総白痴化」など、今も使われているが、造語が社会批評となり、その批評が社会現象となつて、広く一般大衆の感情まで揺さぶる力を發揮した評論家は、おそらく大宅氏だけである。

その大宅氏は晩年の一九六七年から七〇年にかけて、「大宅壮一

東京マスコミ塾」というマスコミ人養成のための塾を作り、この塾は八期にわたつて、延べ四八〇名の塾生を生み出した。実は、私もこの塾の一期生だが、この塾は単なるマスコミ人養成の塾ではなく、大宅氏が理想としていた人間の精神的異種交配をめざすユニークな塾だった。一期の定員は六〇人だが、小論文と面接による試験を受けて入つて来た塾生は、大学生がいたり、既にマスコミの現場で働いている人がいたり、主婦もいたりして、年齢も二十代から六十歳以上まで、バラエティに富んでいた。

大宅氏は、そのように様々な人間を一つの教室に集めることによつて、同一年齢でクラスを構成して画一化してしまう学校教育に対するアンチテーゼを提示し、精神的異種交配によつて新しい人間のタイプを作ろうとしたのである。だから、この塾は「マスコミ塾」というよりも、「人間塾」と呼ぶにふさわしく、そのため、一九七

〇年の大宅氏の死去によつて塾はなくなつても、未だに卒業生同士の交際は続いている。

たとえば、大宅氏の命日近くの日に、毎年、「大宅まつり」と称する集まりをかなり長い間続けたし、それ以後も、卒業生の運営で「駅伝塾」という名のセミナーを開催し、そのセミナーの参加者たちは、九期生ということでも、今も毎月勉強会をしている。

こういう人間関係を築きつけたとなつたのは、人間の精神的異種交配による。雑草教育こそ真の教育であるという大宅氏の理念であつたが、この教育理念の影響を受けた卒業生の有志が、昨年末から取組んできたのは、大宅壮一先生百年・没後三十年のために、何か記念行事をするための相談だった。皆が集まりやすい土曜日を使つて、シンポジウム、あるいは雑誌での特集の売りこみやインターネットでの造語募集など、何か大宅氏に関係する企画を実現出来ないかと懸命に模索した。